

# エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第107号(通巻第167号)  
2013年9月5日発行 発行人:清水武志朗 編集人:  
井上ひさかづ 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山  
複合施設 301 tel&fax 042-376-4572(事務局員は  
常駐しておりません) e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp  
URL http://ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp

## 乞田川って“生き物”いるの？

市内西部に水源があって、連光寺1丁目先で大栗川と合流後、多摩川に注ぐ一級河川の乞田川。多摩ニュータウン



終わってから参加者、スタッフの記念撮影

の造成にあたってコンクリート3面張りの川になってしまい、自然や生物といった昔の子どもたちが遊ぶのどかな川から大きく後退してしまった。

その乞田川で生物を探索する年1回の試み、「乞田川 探検隊 あつまれ！」が9月1日、多摩市水辺の楽校の恒例行事として、乞田・貝取ふれあい館前のであい橋を起点として開かれた。

参加者は、子ども16名、大人16名の計32名。なかには大人で単独参加した女性もいた。これを迎える講師は、水生生物が上野山直樹さん、魚類が大平充さんほか1名。ボランティアスタッフは7~8名だ。

参加者全員とスタッフがライフベストを身につけ、まずのであい橋の下でこの日の川の状態、水温 25℃、COD(化学的酸素要求量)4、ペーハー(PH)7と水質調査の結果が説明される。



親子でガサガサの成果に懸念

いずれも悪い数値ではない。とくにこの数日間には全然雨が降ってはず、川の流れる水量が減っている割には悪くない値だ。

参加者たちはまず網を川底につけて、上流側から足でガサガサと生物を追いこむ“ガサガサ”のやり方を教わり、自分たちで水のなかにひそむ生物を捕獲していく。あちこちで「あ、とれた！ いっぱいいる」といった子どもたちの歓声が上がる。



多くの収穫物が入った水槽

ここ数年、この活動地域では「川の浄化」のために植えた葦(あし)が広く繁茂し、川面の3分の2ほども埋めつくしているところがある。その影響にもよるのだろ



上野山講師が生物を説明する

うが、この日はかつてないほど魚影が濃く、どこでも小魚の群泳が見られた。

そんな効果もあり、子どもたちは「大漁」に大喜び。小はメダカから比較的個体の大

きいかワムツまでおもしろいように網に入り、持参したプラスチックの虫ご内は魚が満員状態に。

往きは上の根橋までガサガサしながら歩き、帰りは川の掃除で、水中や周辺に落ちているごみを拾い集めながらのであい橋まで帰ったが、収集されたごみは 45L 入りの袋で2袋だけとごみの量は比較的少なかった。

さて、ふれあい公園に戻って講師たちが収穫物を分析した結果、水生生物はアメンボ、コヤマトンボのヤゴ、プラナリア(ウズムシ)、ヒル(シマイシビル)、モノアラガイなど。上野山講師によると、このうちプラナリアはごく小さい生物だが、横に切っても縦に切っても2個体に変化するめずらしい生物とのこと。

魚類はカワムツ、トウヨシノボリ、ドジョウ、メダカ、モツゴ(クチボソ)、ザリガニ、スッポンなどが確認された。このうち、カワムツは赤い婚姻色が出ていて、このころが交尾をして産卵する時期なのだという。トウヨシノボリは胸に吸盤がついており、水中のコンクリートの壁に吸着していることが多いため、ガサガサでは大量に捕獲される結果となったようだ。

## 子どもたちが広島で見聞きしてきたこと

第22回多摩市平和展に関連して、市内の小中学校の生徒6人が8月5日から7日まで「広島平和祈念式典」への出席を始め、原爆ドームや平和資料



阿部市長を中心に派遣された6名の対談

館、死者を弔う灯籠流しの見学、語り部からの話を聞いたりして、原爆の恐ろしさを体感してきた。また、多摩市で折っていた千羽鶴を式典会場に献納した。

その派遣発表会が8月25日に関戸公民館の大会議室で開かれ、100人近い市民が聴講に参加した。

公募で選ばれ派遣されてきた子どもは、市立(以下同)大松台小学校5年の横井克哉(かつや)くん、第一小学校5年の渡辺隆円(たかまる)くん、第二小学校6年の杉谷侑翼(ゆうすけ)くん、同玉城佑真(たましろゆうま)くん、鶴牧中学校1年の星野楓(かえで)さん、多摩中学校1年の平山美咲(みさき)さんの6人。それぞれが「広島に行って伝えたいこと」「世界が平和になるために」「原子爆弾の恐ろしさ」「爆風の威力」「広島派遣の感想」「広島で学んだ平和」(生徒の名前順)と題する感想を語った。

爆心地から 2.4 km の地点で被爆し、現在は多摩市内に住んでいる石田喬子さん(79)による被爆体験談もあった。最後に、やはり広島で合流した阿部裕行市長と参加した子どもたちとの座談会があり、子どもたちは「戦争は二度と起こしてはいけない」「自分たちの平和な生活が当たり前だと思っ



多くの市民が報告会に訪れた

「原爆のすごさがわかったので、それをみんなに伝えて自分たちに何ができるか考えたい」「戦争をなくし友だちと仲よくしていくこと」「戦争があったことを忘れずに未来に伝えていく」「普通に生活できていることが平和なんだ」「まわりの人にやさしくしていく」などと各自の思いを語っていた。

## 残暑の下で4日間の「まち美化キャンペーン」



90名以上が参加した多摩センター駅での活動

多摩市まち美化推進協議会の主催する「平成25年度第1回まち美化キャンペーン」が、8月26～29日までの4日間開催された。キャンペーンする時間帯は午後4時～5時と夕方だが、初日を除いて残暑(西日)のきびしいなかでの活動だった。

開催場所は26日が唐木田駅周辺、27日が多摩センター駅周辺、28日が永山駅周辺、29日が聖蹟桜ヶ丘駅周辺。協議会に加盟する各団体がボランティア集めをしてくれたおかげで、参加人数は唐木田駅＝24人、多摩センター駅＝92人、永山駅＝61人、聖蹟桜ヶ丘駅＝60人、これに市役所職員が毎回5～6人参加して、参加者の累計は260人となった。

去年は2回のキャンペーンの合計で302人(1日降雪のため中止)だったので、今年の参加者が仮に累計500人としても昨年より70%ほど増えることになりそう。

また、多摩センター駅ではキリスト教関係者の若い外国人が飛び入りでキャンペーンに参加。永山駅では先生に引率された聖ヶ丘中学校のサッカー部生徒10人ほどが、赤いユニフォームを着て参加してくれた。これは市環境政策部の中村泰三主査のいう「なるべく5～6人の集団で、市民にアピールする(目立つ)ように清掃を行ってほしい」の考えとぴたりと一致するような行動だった。

部活の格好で参加してくれた まち美化推進協議会では、9月22～23日に開かれる「永山フェスティバル」にも「多摩市まちの環境美化条例」の啓発のために出展する。場所はグリナード永山2階入り口近く。

## 映画「アルマジロ」と岩上安身氏トーク

多摩市平和イベント実行委員会の主催する戦場ドキュメンタリー映画「アルマジロ」の上映と、ジャーナリストの岩上安身氏による関連講演が8月11日にベルブホールで行われ、満員の観客を集め、深い感動を残した。

アルマジロは、アフガニスタンの国際治安支援部隊(ISAF)に派遣されたデンマークの兵士たちの出発前から前線におけるタリバンとの対峙を描いた作品で、デンマークの公共

放送のスタッフが部隊とともに生活し、前線での行動もともにして撮影したドキュメンタリー。ヘルメットに装着したカメラが、攻撃を受けたときには銃声とともに空から地上へ半回転する光景もおさめられており、部隊に埋め込まれたような形で取材する新方式として2010年カンヌ国際映画祭の批評家週間グランプリなどを受賞している。



岩上安身氏

一方、岩上氏は早大卒業後、出版社の編集者、週刊誌記者などを経て、1989年～94年まで旧ソ連、東欧圏を取材。ソ連崩壊を目の当たりに取材する。2010年、インターネット報道メディア、インディペンデント・ウェブ・ジャーナル(IWJ)を立ち上げ代表になった。

その岩上氏が語るアフガン戦争とタリバンとは。

アフガニスタンはそう簡単に入れる国ではない。で、アメリカで9.11事件が起きたとき、自分はパキスタンの入国ビザをとった。パキスタンの北部でアフガニスタンとつながる地域は「トライバルエリア」といって、国境などないに等しい。この地域に住んでいるのがパシュトゥン人といっ、タリバンの大半を構成する種族だ。

アフガンは「帝国の墓場」ともいわれている。何度も帝国から侵攻されてはそれを撃退してきた。79年に旧ソ連が北から侵攻したとき、社会主義国としてのソ連の正当性などついでた、だめな帝国なのと思った。

これに対してムジャヒディン(聖戦士)が集結して、これを米国が支援した。この支援によって、ムジャヒディンが育ち、アルカイダ、あるいはビンラディンの登場につながっていく。

89年、10年戦ってソ連はボロボロになって撤退していく。その2年後の91年に旧ソ連が崩壊する。で、そのつぎに米国がアフガンに手を出したというわけだ。

パシュトゥン人はクルド人などと同じように、大国の都合で国家を持たない少数民族に据え置かれている。こうした人たちが、ときとしてゲリラの温床になっていく。

9.11テロのリーダーがアフガンにいてということで、米国は10月7日に空爆を開始、そして11月13日にはタリバンは敗走する。ソ連が10年かかっても勝てなかった相手に、アメリカは1カ月半で勝ってしまった。そういうアメリカの武力の強さを感じたのだが、それもつかの間。アメリカはいまでもアフガンから足が抜けな、映画に出てくる国際治安部隊も駐屯するようになり、カルザイ政権を支えていこうとするのだが、実際にはここからドロ沼が始まっている。

全土的な治安の維持ができず、国土のそこいら中で散発的なテロが行われている。タリバンというのは、都市に働きにきたときは建設労働者などをやり、国に帰ると農業をやっている。文字は読めず、書くこともできず、サインもできない。ただ「この映画の1シーン ◎アップリンク ランの教えではー」と繰り返すだけで、本を読んで知った知識で行動しているのではないが、実際にはそのタリバンを掃討することはできていない。



戦場カメラをかすめる、一瞬でもブレたらダメ、それが「戦場の現実」。